

学校DX戦略コーディネータ特論（Ⅱ）

第15講 「学校DXの戦略と展望」



田中 康平(株式会社NEL&M)

第15講 「学校DXの戦略と展望」

【目 的】

学校DX戦略の策定では、教育機関がデジタル技術を活用して学習モデルの質的な変革を目指し、新たな価値を創出するための計画や施策を立案する。そのためには、現状及び将来的な課題の分析、ビジョンと目標の設定、具体的な方略の設計、組織的な実行などが含まれる。学校DX戦略の展望として、教育機関がDXに取り組むことで志向する新たな価値と課題への対応を理解する。

【学修到達目標】

- ①学校DXのビジョンと目標を明確に設定、説明できる。
- ②学習の個別化と柔軟性を促進するためのデジタル技術の活用方法を説明できる。
- ③デジタル格差を解消するための施策について具体例を挙げて説明できる。

学校DX戦略の策定プロセス

1

現状分析と課題把握

学校のデジタル環境、教職員ICTスキル、教材・システム活用状況を調査し、課題を明確化。SWOT分析で強み・弱み・機会・脅威を把握します。

2

ビジョンと目標の設定

現状分析に基づき、学校DXビジョンと短期・中期・長期目標を設定。KPIで進捗を測定し、関係者と協議して決定します。

3

計画・施策の立案

ビジョン達成のため、インフラ整備、教職員研修、教材導入、学習環境改善の計画を策定。予算、スケジュール、責任者、リスク管理、評価・改善策を明確化します。

(1) 教育機関におけるデジタル技術の導入や活用に関する課題の把握・分析

① 現状調査の実施

デジタル環境や教育情報セキュリティポリシーの把握、
デジタルリテラシーの評価、既存のデジタル活用事例の収集

② 課題の抽出

技術的課題、人的課題、運用課題、財政的課題

③ ステークホルダーからの情報収集

アンケート調査、ヒアリング、ワークショップの開催

④ その他

SWOT分析の実施



(2) 学校DX戦略のビジョン・目標の設定

① ビジョンの策定

DXを通じて学校がどのような場所となり、どのような資質能力を育むのかを描く。
既存の教育目標や方針とDXビジョンの整合性を持たせる。

例

全ての児童生徒に個別最適化された学習環境が提供され、相互の尊重による対話的で協働的な学びにより、地域の未来を担う豊かなキャリア形成の基礎となる資質能力を育む

② 目標の設定

- ・ 短期目標（1～2年）
- ・ 中期目標（3～5年）
- ・ KPI（重要業績評価指標）の設定

③ ステークホルダーとの合意形成

- ・ ビジョンと目標の共有
- ・ 意見の反映と調整

(3) 目標達成のための計画・施策の立案

① 具体的施策の検討

- ・ インフラ整備
- ・ 教職員研修
- ・ デジタル教材の導入
- ・ 新たな学習モデルの確立

② プロジェクト計画の策定

- ・ タスクの分解
- ・ スケジュールの設定
- ・ 担当者の明確化

③ 予算計画の作成

- ・ 必要経費の算出
- ・ 予算の検討

④ リスク管理

- ・ 潜在的リスクの特定
- ・ リスク対応策の策定

⑤ 評価・改善の仕組み構築

- ・ 定期的な進捗確認
- ・ 施策の評価
- ・ フィードバックループの確立

変革には不安や懐疑的な目が向けられる場合もあり、着手できる部分から進めるなど戦略性も求められる。

「成功体験」から「従来以上の価値の実感」を広げる。

学校DXの展望

(1) 学習の個性化

児童生徒は自らの興味や得意分野に合わせて学習の進め方を選択できる機会が増える。

蓄積された学習データやオンライン教材の活用により、一人ひとりが自分の理解度や目標に応じた課題に取り組み、学びの過程を可視化・振り返ることが可能となる。

自己の学習を客観的にとらえ、学び方を調整しながら成長する主体的な学習者としての育ちが期待される。

デジタルポートフォリオの活用

選択式プロジェクト学習

(2) 指導の個別化

DXにより収集・解析された学習データを活用することで、教員は個々の児童生徒の習熟度や理解状況をリアルタイムに把握できるようになる。

これにより指導計画を調整したり、教材を追加したり、必要に応じて発展的学習を提供するなど、児童生徒の学びを支える指導の個別化がよりスムーズに実現される。

アダプティブ・ラーニング教材

オンデマンド授業動画

リアルタイムフィードバック



(3) 学びのグローバル化

海外の学校との連携や共同プロジェクトに取り組むことで、児童生徒は多様な文化や価値観を直接感じ取る機会を得ることができる。

オンライン会議ツールや教育クラウドのクラスルームや共同編集、AIによる翻訳ツールなどを活用し、地理的な制約を超えた意見交換や成果発表が可能となる。

こうした取り組みにより、グローバルな問題解決に向けた意識が高められる。

オンライン国際交流授業

共同プロジェクト

多言語ポスターセッション



(4) 学びのボーダレス化

インターネットを通じて自宅や地域の施設、さらには他の教育機関ともつながりながら学ぶ仕組みが整うことで、学習の場と時間の制約を超えたボーダレスな学習環境を実現。

学校外の専門家や地域資源を活かしたプロジェクト型学習やオンライン講座なども展開し、児童生徒が自分の興味をより深く掘り下げ、豊かなキャリア形成に繋げる機会を提供する。

地域連携オンライン講座

校外学習施設とのオンライン連動



課題と対応策

課題（1）ICTスキルやデジタル活用の経験に差がある

■ 小さな成功体験づくり

ICT初心者向けに「1回の授業で1つの機能を使ってみる」程度から始め、徐々に活用の機会を増やす。

■ ペアorグループでの「OJT」

経験豊かな教員と初心者がペアを組み、実際の授業中にサポートを受ける。ICT支援員との協働も推奨。

■ 活用アイデアの「テンプレート」共有

校内向けWebサイトや共有フォルダに「学校DXテンプレート」や「ICTを使ったミニアクティビティ例」を登録し、気軽に活用できる環境を整備。

課題（2）コーディネータの確保・育成

役割の明確化

DXに関する情報共有、
施策実施の支援（ファシリテーション）
プロジェクトの進行管理、事例収集

体制構築

定期ミーティング実施
問題点や成功事例の集約

研修プログラム導入

スキルチェックリストの作成
eラーニングの活用

外部リソース活用

業務委託の導入、など。

学校DXを中長期的視点で推進するコーディネータの役割は重要である。内部人材の育成と外部リソースの活用を組み合わせ、効果的な体制を構築することが求められる。

課題（3） 専門家との連携

大学や研究機関による助言

教職課程を有する大学や教育工学の研究機関に、学校DXに関する授業デザインの検証や助言を依頼する。教員研修のカリキュラム開発や実施を大学の教育学研究者に依頼し、継続的なスキルアップを図る。

国の支援施策の活用

文部科学省「学校DX戦略アドバイザー事業」を活用し、専門家の派遣を受けて指導助言してもらおう。これにより、最新の知見や実践例を取り入れ、質の高い教育実現につなげる。

課題

- ① 学校DX戦略の策定において、なぜ現状分析が重要なのでしょうか？
具体的な例を挙げて説明してください。
- ② 学校DX戦略の展望において、デジタル技術を活用した教育の個別化がなぜ重要なのか説明してください。
また、個別化がもたらす具体的な利点は何ですか？
- ③ 学校DX戦略の課題として挙げられている「デジタル格差」とは何ですか？
その解消策を2つ挙げて説明してください。